

歯茎でウシが草を食む ーケニア西部ビクトリア湖岸のルオの村でー

皆さんはウシのことをどのくらいご存じでしょうか？日本の特に都会で暮らしていると生きているウシに出会う機会が少なく、ウシといえばせいぜいスーパーでスライスされた肉がパックに入って並んでいるところか、「焼き肉屋さん」でタンやハツなどいろいろな部位に分かれて出てくる肉に出会うくらいなのではないでしょうか？牛肉は高価だし、健康に必ずしも良いばかりではないので毎日と食べるという人は少ないのではないのでしょうか。しかし、ウシに関連した食品はほぼ毎日食べている人がほとんどだと思われます。たとえば、ヨーグルトやチーズ、生クリームがたっぷり塗られたケーキ、バターがたっぷり入った焼き菓子、プリン、アイスクリーム等々あらゆる乳製品を含めると多くの食品にウシを由来とした成分が含まれています。したがって、私たちはウシの存在に大きく支えられて日常生活を営んでいるといえるでしょう。にもかかわらず、生きている牛にほとんど接することのない生活を営んでいる多くの日本人にとって、この動物が一体どういう生態を持つ動物であるのなかなか知る機会は少ないのが現状でしょう。

ウシは哺乳綱鯨偶蹄目ウシ亜目ウシ科に分類される動物で、ウシ目の動物は、消化しにくい繊維分を消化するために、本来の胃（第4胃）のほかに、食道から第1～第3の胃を分化させ、計4つの胃をもっています。

ウシには上の前歯がなく、そのかわり歯茎が非常に丈夫にできており、草を食べるときは舌で草を巻き込むように引っ張って、上歯茎と下歯で噛み切ります。日本の大学の畜産学を学んだ私は、ウシが舌で巻き取れる長さに草を生育させることがウシの採食行動に適した草地の管理の仕方であると教えられました。



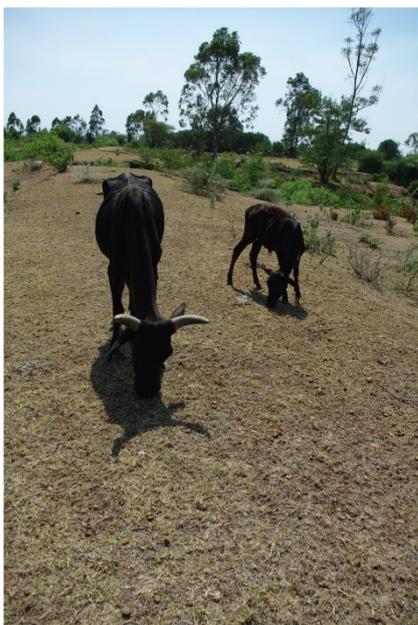
写真①歯茎で草を食むウシ

ケニア西部ビクトリア湖岸のルオの村

ビクトリア湖はアフリカ最大の湖で、ケニアの西部に位置し、ケニアの他にタンザニアやウガン

ダとも面しています。ビクトリア湖の東岸に広がる標高約 1000m ほどの平原はルオランドとも呼ばれ、ナイロート系の牧畜民を起源とするルオの人々の居住地になっており、人々は牧畜と漁労、トウモロコシなどを栽培する農耕を中心とした暮らしを営んでいます。

ルオの人々が飼っているウシは、ほとんど草が生育していない状態の草地で歯茎を使って草をおしり取って草を食べていました(写真①)。次の写真(写真②)は一見してすごく乾燥しているのが分かっていただけだと思います。乾季の終わりで緑の草がほとんどない時期のものです。厳しい乾季が2、3年に一度みられるのですが、そういった年は村のウシが次々と死んでいました。



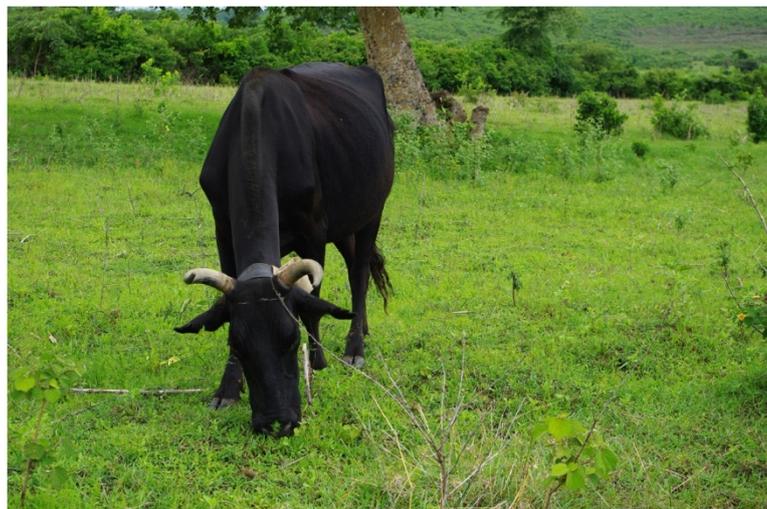
写真②乾季末の牧草地

家畜が作り出す風景

雨季には草は緑になりますが(写真③)、草は一年を通じて短いままに保たれます。

この草はこの地域のどこでも見られるイネ科の草本ですが、ウシやヤギ、ヒツジなどの家畜が食べないと実は1m以上に伸びます(写真④)。

この草がこのような状態になるのは家畜が入り込めないよう囲われた一部の場所だけで、村の中はたとえ家屋の周りでも草は短く写真⑤のような風が広がっています。



写真③雨季の牧草地



写真④家畜が入れない場所の草

生きるために食べ続ける

ウシは成獣で一日に乾燥した重さで約 10 kg の草を食べるといわれています。この地域のウシはこの量を食べるのに日中ほぼ草を飲み続けます。朝、7 頃ごろ牛囲いから出されたウシは早速採食を始めます。その後、10 時頃まで家屋の周りの草を食むのですが、その後、放牧地に移動させられ、夕方 5 時から 6 時ごろまで放牧地で過ごします。



写真⑤ヒツジの放牧風景

その間、休憩をほとんどせず草を食べ続けます。日本の放牧地でのウシの行動を観察したことがあるのですが、十分な草がある場合ウシは昼過ぎにはひざを折り、座って反芻といわれる行動を一定時間とります。第一胃の草を吐き戻し、口を横に動かし草をすりつぶし、さらに消化しやすくしてから再び飲み込むのです。

でも、この調査地のウシは日中座り込んで反芻するという行動をほとんどとりませんでした。ウシは、牛囲いから出て戻されるまでの間、まさに、歯茎で草を飲み続け、できる限りの草を腹の中にいれようと努めていました。

そんな日常が続く中でも、メス牛はミルクをだし、子ウシに与え、我々人間はそのおこぼれに預かった牛乳で作ったミルクティーを毎朝いただく。この地域の人々にとっても砂糖たっぷりの紅茶に入れるミルクは貴重な栄養源の一つになっていたと思われる。

山根裕子（やまねゆうこ）